

## 新型コロナ 今も残る「2度目の後遺症」の心配

2022/6/13 谷口恭・太融寺町谷口医院院長 毎日新聞



新型コロナウイルスの水際対策が緩和され、抗原検査を受けずに検疫カウンターに向かう人たち（右）。検査が必要な人、登録情報に不備がある人などは看板左のレーンに通される = 成田空港で2022年6月1日午前8時48分、北山夏帆撮影

「新型コロナウイルスには、一度感染すればもうかからないのでは？」という希望的観測が消え去ったのは2020年8月24日のことでした。世界初の新型コロナ再感染の事例を香港の科学者が報告しました。その後、再感染は世界中で次第に増え、再感染どころかいまや3回目の感染も珍しくなくなりました。しかもワクチン接種を受けていても、です。ただし、再感染時に重症化することはさほど多くなく（ないわけではありません）、楽観する声もあります。「複数回ワクチン接種を受け、複数回感染すれば、その次に感染したときは軽症で済む。だから新型コロナはもはや恐れるに足りない感染症だ」という声は次第に大きくなってきています。けれども、無条件で楽観することに危険性はないのでしょうか。

私が院長を務める太融寺町谷口医院（以下「谷口医院」）の患者さんのなかにも「新型コロナに感染するのは今回で3回目」という人が増えてきています。谷口医院では「オミクロン株に2回感染」という人はまだいませんが、海外ではすでに報告があります。例えば、アメリカではオミクロン株の中のBA.2系統とBA.2.12.1系統、南アフリカではBA.4系統とBA.5系統に感染した事例が、米紙ニューヨーク・タイムズの記事で紹介されています。

この記事で取材を受けている米国のウイルス学者、Kristian Andersen氏は「いずれほとんどの人が年に2、3回は感染するようになるだろう」と述べています。社会全体でみれば（公衆衛生学的にみれば）、新型コロナが「軽症化」してきているのは間違いありません。ならばいつまでも自粛を続けるのではなく、人の往来をコロナ前に戻し、再び国際交流を活発にして経済を活性化させるべきだという考えは間違っていない。

回復しても「またかかるかも」

ただし、それは「社会全体でみれば」です。再び始まるであろう華やかな好景気の陰に、

長期間の苦しみに悩まされ続ける人も少なからず存在し続けます。「後遺症」です。

新型コロナの後遺症について、私は「ポストコロナ症候群」と名付け、本連載で繰り返し取り上げてきました。前々回「新型コロナ 『私は後遺症』と悩む患者は5タイプに分けられる」では、多様な症状を示すこれら後遺症を五つのグループに分けてその違いを紹介しました。幸いなことに谷口医院に継続して通院している後遺症の患者さんのほとんどは時間と共に症状が改善し、発症後、半年以上が経過しても日常生活に戻れないという人はごく少数となりました。

しかしながら、後遺症から回復した人たちから「不安」を聞く機会が増えてきています。それは「また新型コロナにかかったら、また同じような苦しみを体験することになるのでしょうか」というものです。

私は当初「新型コロナに再感染しても後遺症にはそんなに苦しまないのではないか」と考えていました。

そう考えた理由は二つあります。一つは、新型コロナ再感染時の急性症状は軽症で済むという事実です。新型コロナの急性症状が重症化すればするほど後遺症の症状も重くなります。ならば、軽症で済む再感染時には後遺症も軽度で済むと考えたのです。もう一つの理由はワクチンです。新型コロナ後遺症の症状があるときに、新型コロナのワクチン接種を受けて症状が改善した人がいます。また、後遺症の症状がとれてからワクチン接種を受けた人もいます。一般に、ワクチン接種を受けていれば、新型コロナに再感染しても軽症で済むわけですから、当然後遺症も緩和されると考えたのです。

### 3度の後遺症に苦しんだ20代の米国女性

けれども、どうも私のこの考えは楽観的すぎたようです。米紙ワシントン・ポストの記事は、3回新型コロナに感染し、感染する度に後遺症の症状が悪化し、これまで11人の医師の診察を受けた女性を紹介しています。記事によると、新型コロナに感染するまでは健康を絵に描いたようだったという28歳のこの女性、現在は、胸痛、突然の血圧上昇、手のしびれなど多数の症状に苦しめられています。

後遺症に悩む彼女を最初に診断したかかりつけ医は、まず免疫の専門家に彼女を紹介し、その専門家から、循環器科医、腎臓内科医、内分泌科医、神経内科医……と次々に新しい専門医につながりましたが、結局問題は解決していません。

コロナ後遺症など存在しないのでは？と考える人がいますが（医師のなかにもいます）、その理由は検査をしても異常が出ないからです。ですが、この女性の場合、血圧が210/153mmHgに急上昇したことがあり、その後も突然の血圧上昇が記録されています。また、関節痛を自覚したときに「炎症マーカー（inflammation markers）」（注：記事中に詳しい検査項目名がないのですが、おそらく「C反応性たんぱく」や「プロカルシトニン」のような、体内に炎症が生じると上昇する血液検査上の項目）が上昇しています。つまり、つらい症状を抱えている客観的な証拠があるのです。なお、谷口医院の患者さんも、単なる訴えだけでなく血圧や心拍数の異常や血液検査の異常が認められることが多く、これは「後遺症は心因性ではない」という証拠になります（ただし、まったく異常がなくても心因性と断定できるわけではありません）。

この女性の経過を、もう少し詳しくみていきましょう。1回目の感染後に後遺症に苦しめられたものの、そのうちに症状は軽減し血圧の上昇もなくなっていました。しかし、2回

目に感染したとき、急性症状は1回目よりも軽度だったものの、その後、手のしびれを自覚するようになり次第に悪化していきました。3回目に感染したときも急性症状は軽度でしたが、その後さまざまな後遺症の症状に苦しめられています。

米国の月刊誌「Atlantic」にも「後遺症の再発」についての記事があります。この記事でも「過去の感染やワクチン接種は新規感染の重症化を防ぐ効果はあるが、脅威がなくなるわけではない。軽度の新型コロナ再感染が過去の後遺症の症状を再発させる可能性もある」と指摘しています。

### 後遺症の原因として有力な3説

なぜ後遺症が生じるのかについてははっきりとは分かっていませんが、現在有力だとみられる説は、次の三つです。

(1) ウイルスが体内に残存している。

(2) 感染が引き金になり自律神経のバランスが乱された結果、さまざまな症状が出現する。

(3) 感染により免疫系が乱されて、自分の免疫が自分自身を攻撃するようになった。



新型コロナウイルス感染症の後遺症で診察を受ける男性患者（手前）＝大阪市北区で2022年4月15日、梅田麻衣子撮影

新型コロナウイルス感染症の後遺症で診察を受ける男性患者（手前）＝大阪市北区で2022年4月15日、梅田麻衣子撮影

(1)については今後、遺体の解剖が増え、各臓器にウイルスが存在していたかどうか調べられれば、よりはっきりしてくると思います。

(2)と(3)はどちらも正しいのではないかと私は考えています。(2)については、もともと「過敏性腸症候群」や「機能性ディスペプシア」（はっきりした異常がないのに、胃もたれなどの症状が出る病気）、そして頭痛、めまい、といった自律神経のバランスが乱れることで発症あるいは悪化する疾患を持っている人に、後遺症が出る人が多いからです。

(3)については、後遺症が長引く人は中年の女性が多いからです。「膠原病（こうげんびょう）」や「多発性硬化症」といった自己免疫疾患は、中年女性に多いという特徴があります。ということは、コロナ後遺症もなんらかの自己免疫異常の可能性がります。また、過去のコラム「新型コロナ 後遺症の正体は『慢性疲労症候群』か」で指摘したように、後遺症は「慢性疲労症候群（ME/CFS）」と同じ疾患かもしれない、と私は考えています。

(3)についてももう少し詳しく考えてみましょう。谷口医院で私が診ている実感として、コ

コロナ後遺症はやはり中年女性に多いのですが、この傾向は全国的にも言えるのでしょうか。残念ながら日本にはコロナ後遺症のきちんとしたデータがありません。ですが、海外にはあります。

イギリスに、遺伝子関連の検査を担っている「23andMe」という企業があります。この企業は新型コロナに罹患（りかん）した人たち、10万人以上を対象とした調査を実施しました。

### 「女性」「病歴あり」「入院」で可能性増大

この調査によると、新型コロナに感染した女性が後遺症になる率は、男性の2倍以上にもなります。さらに興味深い結果が出ています。後遺症患者の約3分の1に（膠原病などの）自己免疫疾患の病歴があるということです。また、半数以上がうつ病、不安、あるいは心臓発作や糖尿病などの病歴を持っていました。急性期に入院した場合は、入院せずに済んだ場合と比べて、後遺症を発症するリスクが10倍以上になることも分かりました。

では、後遺症のリスクが高い中年女性は（もちろんそれ以外の世代も）ワクチン接種を受けることで後遺症のリスクを減らせるのでしょうか。入院で後遺症のリスクが上がるなら、ワクチン接種で入院を防げば後遺症のリスクも減りそうです。

### ワクチン接種も効果は限定的

ところが、どうも大きな効果はなさそうです。米医学誌「ネイチャー・メディシン」に掲載された論文「新型コロナワクチン接種を受けた後の感染で生じる後遺症（Long COVID after breakthrough SARS-CoV-2 infection）」によると、ワクチン接種で重症化や入院を減らすことはできるけれども、後遺症にかかる率を15%ほど減らせるものの、防ぐことまではできないということです。

「誰もが年に複数回感染しても軽症なのだから規制は不要」という声がすでに大きくなりつつあります。ですが、後遺症に対しては楽観できず、中年女性は特に注意する必要があることをここで主張したいと思います。また、過去のコラム「新型コロナ 取り残される『免疫能が低下した人たち』」で述べたように、元々自己免疫疾患を持っている人はワクチン接種を受けても効果が期待できず、感染すれば重症化するリスクが依然続いていることを忘れてはいけません。